

# 「米国伝道会宣教師文書」に関する様々な報告(一)

— J・H・デフォレスト書簡雑録 —

その(一) 索引 「新島 襄」

若 山 晴 子

ボストンに本部をおく会衆派 (Congregational. 組合教会系とも訳されている。)の海外伝道団体アメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions—A. B. C. F. M. 本誌では学院史の先例にならい、米国伝道会と訳す。)が日本伝道に手を染めたのは、一八六九年のことであった。大陸横断鉄道の開通したこの年、十月初めの年次総会において時の文書担当書記 (Corresponding Secretary) トリート (Selah B. Treat.) は、日本伝道の開始を呼びかけて言った。「今や我々は、太平洋まで一週間で横断してゆきます。サンフランシスコで乗船する。すると、最初の寄港地は横浜なのであります。」

かくて、早くもその月の末に、日本派遣宣教師の嚆矢として、グリーン夫妻 (Daniel Crosby & Mary Jane Forbes Greene.) がサンフランシスコを発ち、翌月三十日に横浜に着いた。明治政府の手で切支丹禁制の高札が掲げられ、浦上にその迫害の手の及んでいる極東の島国から、グリーンンの報告書簡はボストンに向かった。こうして、米国伝道会

の布教記録・宣教師文書の中に日本関係のファイルができる。爾来一二〇年。その間一九六一年に（会衆派と福音改革派とが合同したことにより）、米国伝道会は United Church Board for World Ministries と改まったが、この時まで日本伝道のために派遣された宣教師の数は三七四名に及ぶという。

これらの宣教師たちはそれぞれ、ボストン本部の文書担当書記宛てに随時報告の書簡を送り、その書簡は数十冊のファイルに収められて、現在ハーヴァード大学のホートン図書館に保管されている。我々はこれを宣教師文書と呼び、そのごく一部のものを、マイクロフィルムのコピーによって史料として整備することを始めたが、この経緯は本誌第一号に紹介したとおりである（四二―五五頁）。なおその後、一九一九年までの日本関係文書がマイクロフィルム化されて市販され、本学院図書館にも収蔵されたことにより、宣教師文書の研究は一層身近かなものとなり、我々は、米国伝道会の伝道事業の一端として建てられたこの学院の歴史を、更に広い立場から跡づけてゆく楽しみを享受し得るに至った。とは言え、この文書は余りにも厩大で、ひとり我々のみで満足な史料操作をし果す<sup>お</sup>などは、望むべくもない。そこでせてものことに、これまでどおり歴代院長（校長）の書簡の訳出・註記を続ける傍ら、関連ある文書の中から目に立つものを時宜に応じて拾いあげ整備し、適意の形にまとめておくことにした。これらの集成が、今後、本誌において『米国伝道会宣教師文書』に関する様々な報告」なるシリーズとなる。

さて、本稿で取り扱う書簡の発信人ジョン・ハイド・デフォレスト博士（John Hyde DeForest, 1841-1910）は、神戸女学院第五代院長デフォレスト女史（Charlotte Burgis DeForest）の父君である。そのため、一八七四年十一月に来日して以来の三五年六か月を大阪と仙台に居を定めての伝道活動に捧げた博士自身と本学院との間には直接の関係はなかったが、縁は深く、我々は早くからその書簡に接する機会を与えられたものであった。但し、およそ三五年の間に

ポストンに送られた報告書簡は四三一通に及び、その全てを限なく検証する力はなかったから、その取り扱い方はかなり断片的なものになっている。本稿の如きテーマと構成を持つものが生まれたのは、そのためでもある。

デフォレスト夫妻（夫人はElizabeth Starr DeForest, 1845-1915）の来日の旅は、同じ米国伝道会の任命を受け、また接手を領して帰朝する新島 襄（Joseph Neesima, 1843-1890）と道連れの旅であった。この時以来、両者の交わりは親密なものとなり、時に意見の不一致が生じることはあっても、これを伝えるデフォレスト書簡の口調にはいささかの翳りもなく、このよき関係が終生に亘ったことを思わしめる。たとえば、東北伝道を志した新島の企図に、当初、宣教師たちの現実の力量を慮って難色を示したものの、一たび心を決めるや自ら東北に赴いて、新島の建てた学校を守り、廃校後も尚現地に留まって東北伝道に身を捧げたデフォレストの選択の中にも、二人の深い信頼関係を見ることができよう。かかる両者の間柄をデフォレスト書簡の中に跡づけ整理してみようというのが、本稿の目論見であった。

折りしも同志社大学人文科学研究所の一九八九年度の研究会のテーマの一つに、「アメリカン・ボード宣教師文書の研究」という題が掲げられ、同じ史料を扱う者として研究協力者の委嘱を受けた。この厩大にして貴重な文書の体系的整備がかなりの規模で始められることを慶びつつ、本稿をもって感謝の意を表したいとも思っている。

米国伝道会宣教師文書はファイルに従って一〇年毎にまとめられ、それぞれに整理番号が与えられている。本稿の索引と引用の部では、初めに書簡番号、日附、発信地、宛先を列記し、次に、○印の下の（ ）の中に、該当の書簡中、「新島」と明記されている所を書簡冒頭から数えた行数で示し、そのあとに該当箇所の抜萃引用、または内容の要約を記した。「新島」の表記は Mr. Neesima が最も頻回であるが、Mr. のつかない場合もあり、Joseph 又は J. とつけ加えられることもあり、単に N. と略記された所もある。一八九〇年代には Dr. Neesima と書かれたものもあった。これらは引用、要約共に原文に則した形になるよう留意して訳出した。

## 一、一八七〇年—一八八〇年の巻

宣教師文書第一号（一八七四年四月二十八日附）—第五五号

（一八八〇年九月二十七日附）計五五通

第三号 一八七四年七月十日 マウント・カームル<sup>①</sup>発クラーク博士宛。

○（二八行目）「日本人のJ・新島氏に、日曜日の一日を私どもと共に過ごし私の教会員たちに説教をしてもらうことは、できるとお思いですか？」

第七号 一八七四年九月十日 ニューヘイヴン<sup>②</sup>発クラーク博士宛。

○（二四行目）「按手礼式のことですが、これに列席することは、新島氏の知遇を得、それにシーリイ氏<sup>④</sup>の説教を聴けるとあって、私どもに新たな喜びを授けてくれることでしょう。」「九月二十七日に新島氏の按手礼式が執り行なわれることになっていた。」

第八号 一八七四年十二月十二日 大阪発クラーク博士宛。

○（九四—九七行目）日本到着後の第一信。横浜、神戸、大阪での経験を報告したのち、「新島氏に関するちょっとした逸話をお知らせしたい」と前置きして、来日途上の船中で、ドイツ人商人から日本娘とのつきあい方をたずねられた新島氏が、自分はクリスチャンであるからそのようなことは教えられないとニベもなくはねつけた話を告げる。「多分ハーディ大佐<sup>⑤</sup>はこの話をお楽しみ下さることでしょう。」と結ばれている。

○（二〇七、二一〇、二二一行目）「新島に関するもう一つの事」について。教会員に加藤氏<sup>⑥</sup>が最近建てた二八人ばかりの学校は、「新島が来たあかつきには、神のお導きがあれば、新島のカレッジとなるかもしれません。そうして、

活ける水の流れの源となるかもしれません。そうなりますように。」

第九号 一八七五年五月二日 大阪発「親愛なる兄弟たち (Brethren)」に。

○(五〇行目) 大阪の大火の話。その復興は迅速であるが治安は悪く、「今日、新島氏は聖餐式を執り行なっている間に空巢に入られ、ほぼ一〇ドル相当のものを盗まれました。」

○(六〇行目) 「新島について一言申し上げたい。彼は大勢の役人たちの注目的になっています。彼は頑丈ではなく、壮健にすぎるといふものではありません。彼は、これまで以上に、ここを出て家庭を持つことを必要としています。もっとも私は、当面彼が私どもと縁を切らず、どこかに安全に身を落着けるまでは私どもと一緒に暮らしてほしいと思っています。」

第二〇号 一八七五年九月十二日 有馬発クラーク博士宛。

○(二七行目) 「私どもの現在の日本語教師は新島氏の郷里の町の人で、最初の〔師〕よりもさらに有能であります。」

第二一号 一八七五年十一月二十五日 大阪発クラーク博士宛。

○(六、一七行目) 「京都における我々の勢力について、極度に関心をそそる状況」を五つ述べた中で、新島氏の婚約者<sup>⑦</sup>が永年勤めてきた職を追われたこと、知事から新島氏に、学校で公然と聖書を教えないよう要請のあったことを伝える。

第一四号 一八七六年七月十日 有馬発クラーク博士及びトリート博士<sup>⑧</sup>宛。

○(五九行目) 森氏<sup>⑩</sup>が約束を守って『日本の教育 (Education in Japan)』もしくは『著名なアメリカ人たちから森氏への書簡 (Letters from Eminent American to Mr. Mori)』という書物を日米両国語で印刷するよう、必要とあれば圧力をかけてほしいと訴える中で、「新島氏が彼と共に骨を折ることになっています。」「一八七二年に森 有禮は政府の特

命を受けて、アメリカで教育に関する調査をしているが、この時に寄せられた回答の公刊を要望しているものの如くである。」

第四〇号 一八七九年五月十二日 大阪発クラーク博士宛。

○(五七、六〇行目) 「昨日、第一教会は特別の良い時を持ちました。新島がやって来て説教をし、私どもの赤ん坊を含む四名に洗礼を施してくれたのです。…新島氏は大変感銘深い司式をして、大勢のクリスチャンの心からなる感謝を受けました。」「ここに言う「赤ん坊」はミス・シャロット・バージス・デフォレスト<sup>⑪</sup>。のちの神戸女学院第五代院長である。」

第四七号 一八七九年十二月十日 横浜発クラーク博士宛。

○(三、四、一三、二四行目) 「ちょうど五年前、アダムズ博士<sup>⑫</sup>と新島氏と私とは、私どもの生涯かけた事業のために、当地に上陸したのでした。この日曜日、新島と私は、ここから七五マイル離れた安中に居りましたが、そこへ肝をつぶさせるような電報が来ました。アダムズ博士が亡くなって遺体が横浜に在ることを告げるものでした。海老名氏の按手札式の時でしたが、私どもがどれほど打ちひしがれましたことか、充分に御想像いただけましょう。我らの親愛なる新島がこの悲しい話を聴衆に告げるにあたり、私は、式が終わるまではこのことは黙っているよう頼みました。こういうものを耳にしたのは初めてですが、彼の深い感情は昂まり、彼を征服し、彼のしわがれた声が乾いた重い叫びとなって奔りました。『おおアダムズ博士、ああアダムズ博士、彼は日本のために生命を捧げた。』かかる途切れ途切れの絶叫に私ども宣教師たちと全聴衆は我を忘れ、しばしすすり泣きの声だけになりました。グリーン博士<sup>⑬</sup>と私は、アッキンソン<sup>⑭</sup>と新島に日曜日の務めを続けるよう頼んで、急遽「当地に」かけつけて来ました。」

第四九号 一八八〇年二月九日 大阪発クラーク博士宛。

○(二四六行目) 京都のカレッジの祈禱日の集會に招かれての考察。京都の学校に関して、「政府から新島氏に対して、私がうわさに聞いていたような危険が及んだことはおよそありませんでした。」

## 二、一八八〇年—一八八九年の巻

宣教師文書第二九一号（一八八〇年十月二十九日附）—第四

三四号（一八八九年十二月十七日附）計一四四通

第三〇〇号 一八八一年二月二十四日 大阪発クラーク博士宛。

○（四六行目）「カーティス氏<sup>⑩</sup>がその手紙で述べていることは全て、殊に新島氏に関する部分は、まさにその通りで、私も裏書きしたいところです。彼は偉大な仲間ではありますが、事 *giving* に関しては、もう二度と彼にたずねてその口を開かせるようなことはすまいと思うほど、徹底的に失望させられました。」[“*giving*”の意味が不詳であるが、話はおそらく *self-support* のことであろう。一八八一年二月二十三日附のカーティス書簡は、この問題に対する京都伝道区の態度について、かなり激しい口調で論じている。澤山牧師やレヴィット氏<sup>⑪</sup>の如き確固たる *self-support* の信念の持ち主と共にある大阪伝道区の人々の姿勢が、新島氏の方針と相容れなかったことは想像に難くない。]

第三四七号 一八八四年十月四日 大阪発クラーク博士宛。

○（七一行目）アッキンソン氏と新島氏から「生命の途」について教えられ、回心した人の話。

第三五四号 一八八五年一月三日 大阪発 R・C・モース氏宛<sup>⑫</sup>。

○（七行目）モース氏の問いに答え得る人として「日本人の中でも最も有能かつ最も熱心な人物、ジョゼフ・新島氏」を推奨する。「彼は大阪が何を必要としているかをお話することができましよう。但し彼は YMCA とは何の関わりもありません。しかしながら若者たちを十二分に知っており、この際の（…）<sup>⑬</sup>な援助について、熱心な代言者となることでしょう。」但し健康状態がすぐれないので配慮が要ると附記。

第三五八号 一八八五年三月九日 大阪発クラーク博士宛。

○(二六、四七行目) 新島氏の示唆に基づく新分野開拓の案に対し、「七箇条テーゼ」をもって反論する。〔渡米療養中の新島氏は東北伝道を発案し、同年一月八日附で伝道会にこれを訴えていた。〕<sup>⑧</sup>

第三六一号 一八八五年六月 特定の宛名及び署名の記載なし。<sup>⑨</sup>

○(二三六行目) 「上州の旅の四日間」と題した長文の報告で、「我らの愛する新島氏の家のあった所」として安中を紹介。また一一年前の彼の帰還のことに言及し、これらのことは *Missionary Herald* の一八七五年三月号に述べられていると告げる。

第三六七号 一八八五年十一月二十九日 大阪発「親愛なる友人たち」に。

○(二三行目) ある改宗者の話。「また別の機会に、彼は新島氏の手落ち、これまでの日本の説教家のうちでも熱心な人から福音を聞くことになりました。」

第三六八号 一八八六年二月五日 大阪発クラーク博士宛。

○(二二行目) イェール大学総長ノア・ポーター博士<sup>⑩</sup>に東方への旅を勧めるつもりでいること。「ミルやスペンサーらと戦うその偉大な力量と、新島と五人のイェール大学出身者に対する深い関心との故に、来て下さらねばなりません。」

第三七〇号 一八八六年五月三日 大阪発クラーク博士宛。

○(六二行目) 「それから私は新島氏と共に仙台に出かけ、休日明けに新潟にまわります。」「第三五八号の反論にも拘らず、新島氏の新分野開拓の企図に参画して東北への実地踏査に赴くことになったでしょう。」

第三七一号 一八八六年五月十四日 横浜発ストロング博士宛。<sup>⑪</sup>



○(三行目) 「新島と仙台に赴く道すがら、昨夜当地に着きました。」

第三七二号 一八八六年六月一日 東京発クラーク博士宛。

○(二五行目) 仙台で知事<sup>⑧</sup>らの歓待を受けたことを報じる。「新島のための宴席で、知事は、学校のために五千円の寄附を約束すると告げました。」

○(三八行目) 「この事業を無理なく、また私の知る限り不和も悪意もなしに、私どものものとならしめるものは、新島の名以外の何ものでもないということは、全く明らかであります。」

第三七四号 一八八六年七月十六日 比叡山発クラーク博士宛。

○(三九行目) 新潟を訪れた時のこと。「私は該地での協議会に心のこもった招きを受け、また、新島氏を連れて来てくれるようにと頼まれました。」

第三八三号 一八八六年十月十一日 仙台発「親愛なる友人たち」に。

○(二三、三六、三八、四二、四九、八六、一二二、一四二、一四七行目) 仙台に学校を建てるにいたった企図を述べるくだり。「一二年前、ラトランド<sup>⑨</sup>における伝道会の年次総会に出席したことは私の幸運でありました。あの時新島氏は、日本にキリスト教の学校を建てるべく援助を求めて、効力ある訴えをしたものでした。」…と、京都の学校における新島氏の盡力について語り、また、「これを見て昨年、仙台の裕福な一紳士<sup>⑩</sup>が、この地にキリスト教学校を建てるのに彼の名を借りたいと頼んで来ました。」…と、このたびの動機と事情を説明する。「この学校は一八八六年九月二十一日「宮城英学校」として発足。翌年「東華学校」となる。」<sup>⑪</sup>

第三九九号 一八八七年五月二十四日 仙台発クラーク博士宛。

○(三九行目) 「私どもの学校は来月正式に開校します。これには日本の文部大臣森氏の出席を期待しております。富

②田氏も見えるでしょう。また私は、新島氏が来駕し得るようにと願っております。気の毒なことに彼は、大いなる仕事に圧倒されて、すっかり疲弊しているのです。」「〔東華学校の開校式は一八八七年六月十七日。新島、富田両氏共に出席。〕

第四一一号 一八八八年一月六日 仙台発クラーク博士宛。

○(二六行目) 学校の状況の報告。「第一の、そして最も力強いものと言え、富田や新島のような人びとの支援であります。」

第四一五号 一八八八年四月二十日 仙台発宛名不詳。

○(三四、六九、三三六行目) 上州に関する長文の報告の中で、「日本の最も卓越したクリスチャン、ジョゼフ・新島の故郷なる安中での楽しかった一週間」について述べ、新島氏が最初の説教をした寺をたずねたことを二度にわたって記す。

第四一六号 一八八八年五月十六日 仙台発クラーク博士宛。

○(三四行目) この地方の行政上の規制について。「これは元々の体制への回帰であります。そして、十年前に新島氏と京都の兄弟たちが忍ばねばならなかったような不都合を伴っております。」「〔日本の世情に国家主義への傾きが見え始めている。〕

第四二二号 一八八八年十二月一日 神戸丸船上(神戸―横浜間)にて、クラーク博士宛。

○(七、一五行目) 教派合同に関する会合の帰路、この問題について認めた<sup>した</sup>中で、新島氏の態度に言及する。「ハモンド<sup>③</sup>のような条項は、長老派は会衆派を併呑してしまうであろうなどという陳述と相俟って、またその上新島氏が、これについては意見を述べるのも十分な討議に賛同するのも気が進まないということで、私どもの代表の大多数に、

何か自分たちのために落し穴でもあるかのような疑念を持たせました。」「大きな教会の指導者たちは―新島氏と熊本の海老名氏を除いて―、アメリカの会衆派が抱いている不安にまるきり惑わされておりません。」

### 三、一八九〇年―一九〇〇年の巻

宣教師文書第一号（一八九〇年一月十五日附）―第二七号

（一八九九年十一月二十九日附）及び第一二八号（一八九九年

一月十一日附）計一二八通

第二号 一八九〇年三月六日 仙台発クラーク博士宛。

○（六行目） 学校にはとりたてて変化のないことを告げ、「新島氏の死も、私どもの見るかぎり、大方の学生たちの心に表立った印象を残しませんでした。」〔新島 襄はこの年一月二十三日に亡くなった。〕

○（五四、五六行目） 「新島博士はその臨終の床で、当地の南ほぼ八〇マイルに位置する郡山に若い伝道者を派遣する手配をしていました。新島は北国における活動を推進することに大いに心を砕き、そのためにお金を集めました。これは努力を要する町ですが、徐々に足場を得たいものであります。」

第二五号 一八九一年五月二十三日 仙台発クラーク博士宛。

○（六、三三行目） 若松の教会と東<sup>ひがし</sup>氏の按手礼式について述べ、「およそ五年前の北国視察の旅の折り、新島博士は若松を訪れようと強硬に主張しました。」そして「新島博士は、この町を初めて訪れた折り、一四人ばかりに洗礼を

授けました。」〔若松は新島夫人の郷里であることから、この項においてデフォレスト書簡はささやかな脱線を試み、新島八重夫人の明治維新前後の回顧談をも紹介している。〕

○(二三五行目) 学校の最近の苦境<sup>②</sup>について、世論の急な変化、学校に好意的であった知事の転任、富田氏が学校に対する関心を喪つたらしいこと、多数の理事たちの交替という諸事情を説明、「なおその上に、新島博士が亡くなりました。」

第三八号 一八九二年三月二十五日 仙台発クラーク博士宛。

○(二九行目) 閉校式翌日の書簡<sup>③</sup>。理事会の態度について述べる中で、「学校の後援者たちは、新島博士と博士が共労者とした人々とを信任しました。」

第一〇一号 一八九六年七月七日 神戸発バートン博士宛<sup>④</sup>。

○(八行目) 伝道団の年次例会を終えたことを告げ、「我らの愛すべき京都伝道区に数年来増大しつつあった根深い緊張が、ついに破られるに至りました。そして私どもはこれで完全に、新島が創立したこの学校といかなる関わりもなくなくなります。もつとも心の関わりは別で、これは末永く権利を主張することでしょう。」〔同志社と、米国伝道会及びその宣教師たちとの間には、信仰理解の上でも経営経済の上でも、微妙な齟齬が生じてきていた。その結果がこの年次総会決議で、宣教師全員の同志社辞任が決定した。伝道会からの資金援助も翌年には途絶え、同志社と伝道会との関係は事実上決裂した。〕<sup>⑤</sup>

第一〇八号 一八九七年三月八日 仙台発バートン博士宛。

○(二七行目) 「東京における新島帰天七年祭で語られたことの概要」をお知らせしたいと前置きして、横井氏<sup>⑥</sup>のスピーチを転載する。

○(二二、一三一、一三九、一四三行目) 横井氏のスピーチの概要。「我々は今こそ新島の性格をより正しく評価でき

るのであります。…この物質主義的な時代に、ひとり新島のみは外国文明の真髓に目を注いでおりました。…そして、今日のキリスト教の評判のよろしいのは、新島の力に負うところ大なのであります。…この時期に新島を思い起こすことは、きわめて必要であります。」

○(紙背)「時代の風潮に関するこの見解は大変に正確で、新島氏のこのような明晰な洞察力を横井氏が識別していることは、大いに賞讃できます。」

#### 四、一九〇〇年—一九〇九年の巻

宣教師文書第一七五号 (一九〇〇年二月二十七日附) — 第

二七一号 (一九〇九年十二月六日附) 計九七通

第一七八号 一九〇〇年十月三日 仙台発バートン博士宛。

○(二三五行目)「お便りを下さる折り、『新島の生涯 (Nesima's Life)』<sup>⑤</sup>が何版に達したか、お知らせ下さるわけにはゆかないでしょうか。私のものは、彼がなくなつて六か月後に買ったもので、第六版ですが、私はこれを偶<sup>たま</sup>のスピーチの中で述べて、いかにアメリカ人が彼を愛したか、いかに彼は、ほかの日本人の名以上に、合衆国の家々によく知れわたっているか、そして、いかに彼は我々に、いかなる政治家も及ばぬほどに、日本を紹介したことを、示したいのです。」

第一九六号 一九〇二年四月二十五日 仙台発バートン博士宛。

○(七三行目) 「新島との出会いによってその生き方の傾向を変えられた」男の話。

第二四四号 日附及び宛名の記載なし。AFTER THE FAMINE/J. H. DeForest, Sendai で始まるタイプライティングの一文。〔一九〇六年のものと推定される。〕

○(二三五行目) 日本国内を経巡る旅をして、日本の「四半世紀に及ぶ長い靈的飢饉」とそれからの回復の様子を考察したのち、旅の終わりのメッセージを引いて結ぶ。「我々の偉大な共和国の心は、サンフランシスコでは見られなくとも、ペリーの時代以来寄せられた力強い政治的共感の中に、新島の時代以来我々のカレッジや大学の幾千の日本人学生に寄せられたあたたかい歓待の中に、独裁のロシアに対する自由な日本の勝利に際しての心からなる祝賀の中に、示されております」と私が言った時、拍手かっさいが繰り返されました。このように、日本の心はまっすぐにアメリカの方に向かっているのであります。〔殊更に「サンフランシスコ」と言わしめたものは、一九〇六年三月七日にカリフォルニア州議会が日本移民制限に関する決議案を採択したことに対する気遣いであろうか。〕

## 五、一九一〇年—一九一九年の巻

宣教師文書第八五号 (一九一〇年一月二十七日附)—第九一

号 (一九一〇年六月十二日附) 計七通

新島 襄に関する言及なし。〔ジョン・ハイド・デフォレストは一九一一年五月八日東京聖路加病院において帰天した。〕

# 補註

- ① Mt. Carmel, Conn. とある。デフォレスト博士は、一八七一年に按手を領して以来、ニューヘイヴンから七マイルの所にあるこの町で会衆派教会の牧師職をつとめていた。
- ② Nathaniel George Clark (1825-1896). 米国伝道会ボストン本部の文書担当書記(在任一八六五年―一八九四年)。
- ③ New Haven, Conn.
- ④ Julius Hawley Seelye (1824-1895). アーモスト大学教授。一八七六年から一八九〇年は、同大学総長の地位に在った。
- ⑤ Col. Hardy <sup>コールド</sup>。新島 襄渡米以来の恩人、Alpheus Hardy (1816-1887) である。
- ⑥ 大阪伝道区一八七四年七月の受洗者十五名中の一人、松山士族・加藤俊一のことか。
- ⑦ 山本覺馬の妹、八重。一八七五年十月に新島 襄と婚約。この頃、女紅場の舎監の任を解かれている。
- ⑧ Governor とある。当時知事職に在ったのは長谷信篤であるが、実権はむしろ副知事の榎村正直の方にあったという。新島と直接交渉を持ったのも、榎村であった。榎村は一八七七年に知事になった。
- ⑨ Selah B. Treat. 米国伝道会の文書担当書記(在任一八四七―一八七七)。
- ⑩ 森 有禮(一八四七―一八八九)。
- ⑪ Charlotte Burgis DeForest (1879-1973). 米国伝道会婦人宣教師。J・H・デフォレストの二女。神戸女学院在職は一九〇五年から一九五〇年。一九一五年より一九四〇年まで院長の任を負った。
- ⑫ Arthur Herman Adams (1847-1879). 米国伝道会派遣医療宣教師。短期帰米後の日本帰任途上、船中で亡くなり、横浜に葬られた。
- ⑬ 海老名弾正(一八五六―一九三七)。同志社在学中より安中方面の伝道に従事。一八七九年に卒業して、安中教会の牧師となる。
- ⑭ Daniel Crosby Greene (1843-1913). 米国伝道会日本派遣宣教師の嚆矢。生涯を日本伝道に捧げ、東京青山墓地に葬られた。
- ⑮ John Laidlaw Atkinson (1842-1908). 米国伝道会宣教師。来日一八七三年。神戸伝道区を足場に終生広汎な伝道活動に従事。
- ⑯ William Willis Curtis (1845-1913). 米国伝道会宣教師。来日一八七七年。当時大阪伝道区に在り、しばしば長文の報告書簡を認めてゐた。
- ⑰ 澤山保羅(一八五二―一八八七)。一八七七年、浪花教会の創立と共に按手を領した牧師となり、「日本の教会の自給」を主唱。
- ⑱ Horace Hall Leavitt (1846-1920). 米国伝道会宣教師。日本在任中(一八七三―一八八二)は大阪伝道区に在って伝道活動に従事。

19 Mr. R. C. Morse とある。

20 判読不能の短く一語。

21 『同志社百年史 通史編(一)』二七四頁参照。

22 表題の下に By an A. B. C. F. M. Missionary と書かれている。筆跡は明らかに J・H・デフォレストのものである。

23 Noah Porter (1811-1892). イェール大学教授。一八七一年から一八八六年まで同大学総長の地位に在った。

24 Dr. Strong とある。

25 松平正直。新島らが仙台に学校を建てこれを維持することについて終始非常に好意的であったが、のちに熊本県知事となって転出。これは時の獨勢と相俟って、学校にとって少なからぬ打撃となる。

26 Rutland. ヴァーモント州のこの町で一八七四年十月九日、米国伝道会の第六五回年次総会が開催された。この席上新島のした「訴え」については、『同志社百年史 通史篇(一)』九頁以下参照。

27 富田鐵之助のことか。但しこの記述は、前掲書二七六頁に引用された彼の日記の文面とは喰い違っているように見える。

28 前掲書二七三—二八七頁、及び『東北学院百年史』三〇九—三一六頁参照。

29 富田鐵之助。旧仙台藩士。慶応三年米国に留学、維新後外交官として勤務したのち、大蔵省に出仕して日本銀行の設立にたずさわり、一八八八年に第二代日本銀行総裁、一八九一年に東京府知事になった。

30 such articles as Hammonds とある。

31 東 正義(一八六七—一九一九)。同志社に学び、松山女學校に教鞭をとり、神戸、若松、原市、高知の伝道に従事し、一八九一年五月十三日に按手を領している。『天上之友 第三篇』の索引ではアズマと読まれているもよう。

32 『同志社百年史 通史篇(一)』二八四—二八六頁参照。

33 式の様子、またこれに至る事情の考察が四頁にわたって述べられている。

34 James L. Barton. 米国伝道会の文書担当書記。一八九四年、N・G・クラーク引退に伴い、その後を襲った。

35 前掲書四三三—四三九頁参照。

36 横井時雄(一八五七—一九二八)。同志社在学中より今治伝道に従事。一八七九年卒業と共に今治教会を創立し、按手を領した牧師となる。

37 米国伝道会宣教師 J・D・デイヴィス (Jerome Dean Davis, 1838-1910) が新島の帰天直後に上梓した著作のことであろう。